

## 言葉のあなたへ

● 梅 宮 創 造

はじめて外国へ旅立とうとする人が、まず不安に駆られるのは言葉の問題であろう。ふだん日本語とぴったりくっ付いて生活しているために、空気と同じことで、その有難味も、絶えず身近に「ある」ことさえも忘れてしまっている。外国へ行ったなら、そうはいかない。外国の地に足を踏入れたとたん、たちまち酸欠状態におちいって、かつて意識することもなかった空気存在、すなわち自国語のいかに有難いかを知る羽目になろう。——旅立つまえの胸の裡には、たいがいそんな不安が、あるいは恐怖がざわついているはずだ。

おかしなことに、そういう外国初体験者が帰国すると、やたら自信満々の口ぶりで、外国なんか平っちゃら、言葉だってどうにかなるものさ、とやら吹聴しだすのである。出発前にあれだけびくびくしていた言葉への不安は、いったい何処へ行ってしまったのか。

人と人とのコミュニケーションという側面から、ひとつ考えてみよう。互いの意思疎通において言葉は重要かつ不可欠である、という命題を人は少しも疑わず、それだからして、言葉の断絶に放りだされる外国生活ともなれば不安でたまらない。しかし一日、二日と、その不安でいっぱい異国の地に過ごすうちに、それまで想ってもみない、もう一つの動かぬ事実気がつくのだ。互いの意思疎通において言葉なんかなくてもよい、という驚くべき事実。そして、わざわざ外国にまで出かけてやっと発見した（と思っている）この一片の真実から、ご多分にもれず、帰国後のあのふてぶてしいまでの自信と物云いが生れるわけなのである。ウィリアム・ブレイクに倣うなら、かつて幼い耳に飴<sup>こだま</sup>していた「無垢の歌」はもう消えて、力と苦渋にむせる「経験の歌」へと転じたことになるか。いずれにせよ、ここへ来て、コミュニケーションとは何か、言葉はそこにどう関与するのか、という根本の問題につき当たるはずである。

コミュニケーションにおいて言葉は決して万能ではなく、ときに不要でさえあるのは、身边をざっと観察すればわかることだ。うなずいたり、笑ったり、

眉をしかめたりするだけで、こちらの思惑が相手に一とおり伝わることぐらい、子供でも知っている。指で差したり、手を振ったり、身ぶり手ぶりを駆使するのもよい。これはいうまでもなくコミュニケーションの基本であり、意思伝達の第一歩である。伝えたい用件の核心のみを伝えて、相手に理解を促すという、それだけで満足するならば、このように言葉なしでも十分にやっつけていけるはずなのだ。

それどころか、へたに言葉が出しゃばれば、コミュニケーションを台無しにしてしまったり、人間関係さえ壊しかねない場合だってある。古来、言葉のもつ負の一面をいましめ、あるいは言葉の無力をなげく言辭は少なからず、すぐに思いつく例だけでも——口は禍のもと、沈黙は金なり、巧言令色すくなし仁、空理空論、以心伝心、不言実行、等々。日本語にかぎらず、英語でも“beyond description” だの“surpass all description” だの“words fail me” (いずれも「筆舌に尽しがたし」の意)があり、またイギリス人ならば口数の多い輩を嫌って、understatement (節言) の徳を重んじたりもする。“Easier said than done” (言うは易く行うは難し) とか“Few words show men wise” (能ある鷹は爪をかくす) ともなれば、洋の東西を問わぬ立派な格言だろう。

しかし、そうはいうものの、人と人とのコミュニケーションに言葉が大切であることは論を俟たない。言葉なくしてどこまで深いコミュニケーションが可能かなど、問うも愚かである。ただ忘れてならないのは、言葉を介さずに心と心とが充分に通いあい、否むしろ、言葉の介入をよろこばず、言葉を排するところに、かえってうるわしいコミュニケーションが花ひらく場合もあるということだ。冗語や饒舌に沸きくるう世にあればこそ、よけい言葉が邪魔になり、言葉の無力を痛感することしきりである。ならば、言葉とは何か。十八世紀イギリスの文人オリヴァー・ゴールドスミスは、含蓄のあることをいった。「言葉は、相手に意思を伝えるためにあるのではない。意思を隠すためにあるのだ」(ゴールドスミス『蜜蜂』)

ふと、「手談」に思いがおよぶ。これは文字どおり「手」を以て「談」を交わすというものである。何のことはない、手談とは囲碁の別称なのだが、囲碁の対局がどれほど言葉なき談話のやり取りを、無言の舌戦をくり展げることか、それを思えば手談とはよくいったものだ。

私事ながら、囲碁にちなんでこんな話がある。三、四年前のこと、ロンドンにしばらく住んだ折、ひとつイギリス人相手に碁を打ってやろうと考えた。も

ちろん腕に自信があるわけではなく、人さまに誇れるような棋力など持ちあわせていない。ただある種の好奇心から、言語が異なる人間を相手に勝負するとはどんなものか、と思ったまでだ。結果は知っている。そもそも言葉を用いない手談というやつなのだから、言語を異にするもへチマもない。互いにルールを守りながら、知恵をしぼり工夫を凝らして、それぞれの意向を表わし、あるいは意向を隠蔽しあうまでのことである。共通のルールがあり、勝ち負けがあるというだけで、手談は難なく成立する。相手が鼻先をとがらせた気むずかしそうな老人でも、筋骨たくましい若者でも、金髪の美女であっても、なんら変るところがない。これは当たり前といいながら、言葉も顔つきもちがう外国人を目前にして、こうもすんなり事が運ぶというのは、やはり驚きを隠せないものだ。日頃どれだけ、言葉や顔のつくりを意識しながら他人と接しているかという証拠でもあろう。

それはそれとして、もう一つ、異なる言語も共通のルールもすべて超えた所に、やはり何か深いミゾがあるのではないかという心配におそわれたのも事実だ。日本人どうしの間ではまず意識されない、イギリス人固有の思考パターンや、独特な反応などが、手談を交わすいちいちの局面に表れていやしまいか。そんなことが気になってくる。ひろく「文化」とくくられるのが、これだろう。

あれは晩秋のさわやかに晴れた日（イギリスにも快晴の日がある）、その午さがりのこと、ロンドン中央はグレイト・ポートランド街に、さる囲碁クラブを訪ねた。クラブとはいっても、ここは毎週土曜日の午後、学生会館の一室に碁盤を並べて対局を楽しむという素朴な集いである。定刻になると、ちらほら人が集まって、夕方までには二十人ぐらいになる。ここをはじめて訪れて、ぼんやり観戦していたら、見ず知らずの男から対局の声をかけられ、その誘いに応じた。何々ダン（段）とか、何々キュー（級）と自己の棋力を互いに紹介しあい、置石のハンディを決める。さあ始めようとなって、お願いしまアす、なんて頭を下げたりしないのは、それこそイギリス流なのかもしれない。すーっと勝負の真っ只なかに入っていく。

思えば、イギリス式のパーティにも似たような印象がある。人びとがパーティ会場に現れるなり、めいめいがグラスを手にとって、もう飲みだすのだ。誰かれの挨拶だの乾杯などは後まわしにされ、パーティはごく自然に始まり、自然の勢いで盛り上がる。挨拶やスピーチがあるとすれば、宴なかばで座がゆるんだようなとき、一種のアトラクションとして提供されるぐらいのものだ。形

式よりも実質を重んじるのは、何につけ、イギリスのやり方の根本であるように思われる。

イギリス流の碁も、概して小ぜりあいを好まず、それよりも実質の地を大きく獲得していく戦法に傾いているようだ。そういう相手とばかり対戦したせいかどうかかわからないが、たいがい全体を見渡しながら構想を練るのが好きなようで、従って長考のタイプが多い。いつまで待っても次を打とうとしないから、もしや相手は自分の番を忘れていやしまいか、と心配になるほどだ。こっちは、いささかせっかちに打つ。一手また一手を熟考しながら進めるというよりも、直感のひらめきに頼る。そうして、大きな失敗をやらかさななくても、結局負けてしまう。こっちは優勢のつもりでいい気になっていると、蓋をあけてみて、とんでもない結果に終るものだから気分がさっぱりしない。

共通のルールを基盤にしながら、国がちがえば囲碁もやはりちがう。要するに文化のちがいというところに帰着するのだろうが、囲碁ひとつ取っても、その細部に文化のちがいが現れるというのは恐ろしい。人と人との間にきざまれた深い暗いミゾをのぞき見る思いがする。

一局が終わったところで、短い感想をそれぞれ述べあうこともある。言葉のない世界に言葉が復活する瞬間だが、ここで再び俗界に降り立ったような、ふしぎな安心感をおぼえるのはどうしたものだろう。相手の思考の展開なども、言葉で説明されると、へんに納得させられてしまうからおかしい。言葉の魔力、あるいは効能といおうか、ともあれ言葉の機能の一つにはちがいない。

碁の用語にはなかなか気の利いた英語が当てられていて、そんなものに触れるのも愉快だ。シチョウは ladder (はしご) で、コウ材は threat (脅し、または圧力)、ウツェガエシは trap (わな) という。もっとも石は stone、星は star、コウは ko と、はなはだ味気ない語もある。こういう言葉の表面にあって、その国の文化の固有色はいよいよ濃厚であるのに、それを異文化間のミゾと感ずるよりも、オブラートにつつまれた異物への興味と化してしまうのは、これまたどうしたものか。かたや、言葉のかなたにあって、人それぞれを分けへだてるミゾが厳然と存在しているはずなのに、ほかならぬ言葉が、そのミゾをおおひ隠してしまっているようなのだ。

ミゾ、あるいは文化のちがいとは、そもそも何に起因するものか。ルールや形式や約束事などの、互いの共通項をよそに、それらを一切無視するかのような、異質の、相交わらぬ分子がいつまでも残る。これは何を意味するか。ここ

にジャン＝ジャック・ルソーの鋭い指摘が思いだされる。人間の原初の欲求は互いに互いを遠ざけるのだ、とルソーはいった（ルソー『言語起源論』）。なぜ互いに互いを遠ざけるのかといえば、相手を敵と見て、相手を恐れるからである。敵に対しては、その攻撃からわが身を守らねばならない。敵を排斥せねばならない。

ロビンソン・クルーソーが無人島にただ一人、王様の暮らしを樹立したところで、いきなり砂上に人間の足跡をみつけたときの恐怖を想ってみるとよい。ただの冒険談だと侮ることなかれ。クルーソーはわれわれを虚構の翼にのせて遠い原初の地へと連れていく。そこで明かされる真実が——人は他人の存在を恐れる、というものだ。

こうして人びとは次第に遠ざかり、人目を避け、未踏の地にまで分け入って、個々にめいめいの生き方を始めた。さもなければなぜ、寒冷の極地にも赤道直下の炎熱地帯にも人が住むようになったのか、とルソーは問う。言葉の必要性なども、人間の本質という、このきびしい基本認識から捉えられているようだ。身体的欲求を満たすためだけなら、ジェスチュアで充分である。人間はそれに加えて精神的欲求を持ち、情念を持ち、それを表わすために言葉が要るのだ。言葉は、敵どうしがそれぞれ退けあいながら、なおかつ情をもって融和しようという、この二つの矛盾する力のせめぎ合いから発生したと解釈される。言葉の役割だの、言葉によるコミュニケーションだの、今あらためて考える上で、ルソーの見解は示唆するところが多い。

再び、囲碁の話に戻ろう。囲碁は仮想の敵を目前に、融和をもとめずして戦う。言葉は無用である。後日、こんなこともあった。ロンドンのクラブで識りあった碁敵にロジャーという老人がいて、ある日彼が、別の囲碁会を紹介してくれた。週に一度きりでは物足りないだろうというのだ。聞けば、ロンドン郊外のハムステッドの坂上に建つ古い教会の一室を借りて、毎週火曜日の晩に碁盤を囲むのだそうである。ハムステッドなら、住まいからそう遠くない。

さて、フィンチリー街の途中を左に折れて坂道にさしかかり、ひっそりとしたハムステッドの住宅地区をしばらく歩いていくと、右手に古めかしい教会が見えた。はじめての晩、少し早目に着いて、教会の暗い墓地のかたわらに立っていると、前方の暗闇に人影が動いてこっちへむかってくる。

——もしもし、碁においでで？

——そう、あなたも？

この男に導かれて裏手の扉から教会のなかに入った。正面の大きな扉は冷たく閉ざされていて、こんな裏口から入るなんて、教えられなければわかるものではない。

なかに入ったところが、まだ誰も来ていない。男と二人で折りたたみの椅子やテーブルをほどよく並べた。それから、部屋のすみの巨大な収納箱のなかから碁盤をいくつも取りだして、それぞれのテーブルに配置した。そうこうするうちに、一人また一人と同好の士が登場した。驚いたことに、グレイト・ポートランド街の囲碁会で対面した何人かが、ここにも顔を見せた。

——やあ、今晚は。

——おやおや、今晚は。

ここはせいぜい十人ほどの集まりである。対局中は誰もが沈黙を守りとおすから、室内は妖しいまでにしんとして、それと好対照に、となりの部屋の人声がばかにうるさい。

——どういう連中だい。

とロジャーに小声で訊いたら、

——懺悔集団さ。

という返答には驚いた。教会だから懺悔があってもおかしくはないが、しかしそれを集団で、騒ぎたてながらやるというのはよくわからない。めいめいが告白だか懺悔めいた話を持ちだして、喧々諤々、やたらに白熱した若い男女の声がひびいてくる。言葉の氾濫である。それが夜の十時ぐらいまでつづく。やがて、うるさい集団がそろって部屋から出ていくと、あとは水を打ったように静まり、夜がしんと更けていく。囲碁はいかにも沈黙のなかに、言葉の立入らざるうす闇の別天地に、人と人とが辛うじて相交わるという感をますます深めた次第である。

かたや言葉のふりそそぐ大地と、かたや言葉のかなたにひらける無言の天空と、それぞれの領域にそれぞれのコミュニケーションが栄える。この教会の一夜に、もしもルソーが居あわせたなら、彼ははたして何と思っただろう。

\* 囲碁の別称については「手談」のほか、豊島稲門囲碁会の森田正己氏のご教示により、「橘中」「腐斧」「忘憂」「爛柯」「清楽」など味わいぶかい呼称のあることを知った。